

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：23501

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14099

研究課題名（和文）熟議を支える教師教育者の役割：合理性と寛容性の両立に向けた能力開発手法の考察

研究課題名（英文）Inquiry on the roles of teacher educators in fostering rationality and tolerance as the foundation of deliberation

研究代表者

山辺 恵理子（Yamabe, Eriko）

都留文科大学・文学部・准教授

研究者番号：60612322

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：第一に、コルトハーヘンのリフレクション論に基づく、演劇の手法をも取り入れた教員養成課程向けのプログラム開発を行い、コロナ禍には同プログラムのオンライン化も実施した。第二に、哲学対話に関する海外視察やヒアリング調査を行い、その手法を取り入れたワークショップの開発を行った。例えば、映画 "Behind the Curve" を視聴し哲学対話を行なった上で、「真理とは何か」を映画監督のダニエル・クラーク氏と議論するハイブリッドのプログラム等を開発・実施した。第三に、訳本としてネル・ノディングスらの『批判的思考と道徳性を育む教室』（学文社、2023年）を出版。その内容をもとにした研修も開発・実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で開発した大まかに3種類に分けられるプログラム・ワークショップは、自身の価値観の自覚と言語化を促すことで、自分とは異なるバックグラウンドや価値観を持つ人との対話を手助けする点、「真理とは何か」「生/死とは何か」といった問いで普遍的な概念を改めて捉え直すことで、価値観の深い部分における他者との差異と共通性について対話することを促す点、それぞれの人の価値観が社会的課題への立場の衝突にどのように関わっているのかに関する考察に繋がる点で、熟議を促す性質を持つものとなった。ノディングスらの『批判的思考と道徳性を育む教室』の出版と合わせて、熟議のための教育プログラムの具体例を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：First, I developed a reflective course within a teacher education program based on Korthherhen's theory of reflection, additionally incorporating theatrical approaches, and made the program available online during the pandemic. Secondly, I conducted observations and interview surveys on philosophical dialogue in the U.S., and developed workshops incorporating the approach. For example, we held a hybrid program in which participants first watched the film "Behind the Curve" and engaged in a philosophical dialogue, followed by a discussion with the director of the film, Daniel Clarke, on the theme "What is truth?". Third, we published a Japanese translation of Nel Noddings and Laurie Brooks (2017). Teaching Controversial Issues: The Case for Critical Thinking and Moral Commitment in the Classroom. Teachers College Press from Gakubunsha. Another workshop was developed based on its content and was held for the open public.

研究分野：教育哲学、教育の倫理、教師教育

キーワード：リフレクション 哲学対話 論争問題 ワークショップ 教師教育 プログラム開発

1. 研究開始当初の背景

現代では、地球温暖化など、多様な国や地域、専門性の人々が協働しなければ解決ができないような社会課題への注目が集まっている。しかし、むしろ世界的に分断も広がっている。次世代が分断を乗り越え、対話的・協働的に課題解決を志向していけるようになるためには、教育及び教師の役割が重要となる。

このような問題意識のもと、児童生徒の対話的・協働的な課題解決を促す教育実践研究等は多く展開されている一方で、そうした実践を展開する能力や経験を有する教師の育成という、教師教育における課題に目を向けた研究は比較的少ない。さらに、そのような教師を育てる教師教育者 (teacher educator) の役割に焦点を当てた研究となると、より一層少ないというのが現状だといえる。

そこで本研究では、対話的・共同的な課題解決に必要なプロセスとして、論理的整合性と倫理的寛容性を兼ね備えた熟議があると仮定して、それを実現できる子ども・若者を育成できる教師を養成する教師教育者の役割に注目した。

2. 研究の目的

論理的整合性と倫理的寛容性を兼ね備えた熟議が実現されるためには、合理的判断力と多様な他者と共生する能力を持った子ども・若者を育成することが重要である。そして、そのためには、そのような子ども・若者を育成する教師を養成する教師教育者が果たすべき役割も肝心であると考えられる。このことから、本研究は、論理的整合性と倫理的寛容性の両方を備えた熟議のあり方を探究し、そのために必要な合理的判断力と多様な他者と共生する能力の開発を促す教育方法を、さまざまな教師教育者の実践や教師教育プログラムの事例研究から抽出することを目標に設定した。

そのうえで、本研究では「リフレクション」と「哲学教育」のプローチに着目し、国際的に活躍する教師教育者が展開している実践の視察やヒアリング調査を行った。異なる課題を抱えた各国の教育現場を前に、教師教育者は教員養成や教員研修に当たってどのように取り組んでいるのか、またその実践をいかに日本の文脈に適用することができるのか、を考察した。

3. 研究の方法

本研究では、熟議について従来、期待されてきた論理的整合性と、近年その重要性が指摘される倫理的寛容性の双方を矛盾なく実現するために、その手がかりとして「リフレクション」と「哲学教育」に着目し、それぞれの分野における教師教育者らの取り組みについて考察することを計画した。

具体的には、リフレクションの分野ではユトレヒト大学名誉教授の Fred. A. J. Korthagen の実践に、哲学対話の分野ではハワイ大学教授の Thomas Jackson の実践に注目する。そして、この2名の教師教育者の実践や、構築したプログラムを視察・分析することで、これらの教師教育実践のポイントと教師教育者として果たしている社会的役割について考察し、ここから得られた知見を日本の教員養成・教員研修の文脈に適用する方法を検討する予定を立てた。

ただし、本研究は途中で2点の大きな変更を行なった。第一に、研究期間中に新型コロナウイルスの感染拡大が起こったことで海外視察の予定を一部断念せざるを得なかった。そのため、インタビュー調査は断念せざるを得なかった。リフレクションに関して、それまでに収集していた Korthagen が開発した教員研修のプログラムや執筆した文献の分析を行なったうえで、その要点を取り入れたプログラム開発を行い、オンラインおよび対面で実施した。また、哲学対話については、視察中心の出張に切り替えたうえで、文献研究でできるだけ補填した。また、こちらも国内で実施できるプログラム開発に力点を置き、オンラインと対面を組み合わせたハイブリッド型のプログラムを開発・実施した。第二の変更点は、研究の途中に、リフレクションと哲学対話のアプローチだけでは社会課題についての対話経験が不十分になる可能性があると考え、論争問題というもう一つのアプローチを追加で研究することにした。ただし、先述の通り海外出張には制約が多かったため、Nel Noddings らが出版した論争問題に関する対話を高校の授業に組み込むことを提唱する書籍 (Nel Noddings and Laurie Brooks (2017). Teaching Controversial Issues: The Case for Critical Thinking and Moral Commitment in the Classroom. Teachers College Press) を主な文献とした文献研究を行うことにした。

4. 研究成果

第一に、何かしらの被害が生じた際に「その事態を正すとは具体的に何を指すのか」といった事柄を当事者同士で対話する修復的正義のアプローチが持つ教育的意義と課題を整理すること

から始めた。この研究は、World Educational Research Associationの国際大会での口頭発表 Eriko Yamabe. (2019). Rethinking the Ethical Validity of Restorative Justice in Education. および荒木寿友・藤本文 編著『道徳教育はこうすれば もっと おもしろい: 未来を拓く教育学と心理学のコラボレーション』(北大路書房、2019年)所収の山辺恵理子「法教育と道徳教育: 当事者視点で反道徳的行為への対応を考える「修復的正義」」にて発表した。後者では、道徳教育等の文脈で学校教育の中に児童生徒たちが直面している実際の問題や衝突を扱うことを避けて抽象的な議論に終始しがちであることを指摘したうえで、修復的正義のアプローチのように実際の問題を扱うことの重要性を論じた。一方で、前者では修復的正義の意義を認めつつも、当事者たちの間で支配的な考え方(バイアス)が存在した場合に公正な判断に到達できない可能性があるという課題を指摘した。

そのうえで、本研究プロジェクトの中心となるリフレクションと哲学対話のアプローチを取り入れた教師教育の取り組みへの研究に進んだ。まず、コルトハーヘンのリフレクション研修では、他者との衝突やすれ違いが起きる背景に自己と他者の認識のズレがあることを自覚するために他者側の認識を想像するワークが取り入れられているが、この際の想像力をより豊かにし、それまでの自身一人想像では思いつかなかった新たな視点を得られるようにするために、演劇の手法を取り入れたプログラムを開発し、オンライン版も含めて3度にわたって実施した。結果として、演劇の手法を取り入れることで自分以外の人物に感情移入でき、それらの人々の行動だけでなく感情や欲求をも想像しやすくなることがわかった。また、現実離れをしたプロットを用意することで、思考の幅をさらに拡大し、自身の常識を疑うような思考が開かれていくことも確認した。なお、コルトハーヘンのリフレクション論を教師が学ぶ意義については、『ポジティブ&リフレクティブな子どもを育てる授業づくり 「学びに向かう力」を発揮し、協働的に学ぶエデュスクラム』および『ポジティブ&リフレクティブな子どもを育てる学級づくり: 「学びに向かう力」を育てるこれからの学級づくり入門』(いずれも中田正弘 編著、共著、学事出版、2020年)に記した。

次に、哲学対話に関する海外視察やヒアリング調査を行った。2019年にはコロンビア大学のMegan Laverty教授のもとを訪問し、同大学やニューヨーク大学の大学院生らが行っている刑務所や地域での哲学対話実践について話を聞いた。その後、ここで学んだ手法を取り入れたワークショップの開発を行い、約5回実施した。そのうちの一つに、ドキュメンタリー映画 "Behind the Curve"を視聴し哲学対話を行なった上で、「真理とは何か」を同映画の監督ダニエル・クラーク氏と議論するハイブリッドのプログラムがある。映画が映し出すものの中から何を問いかけられたと感じたかを参加者一人ひとりが言語化し、それらのテーマについて哲学対話をする中で、監督の視点だけでなく幅広い角度から映画の内容を掘り下げて検討することが可能となり、監督との議論においても、監督へのインタビューではなく、監督を交えた対話が展開され、監督自身からも好評をいただいた。さらに、2022年にはハワイ大学主催の子どものための哲学に関するサマー・シンポジウムに参加し、現地の学校や教員研修での実践を視察した。ハワイでの実践については、上述の『ポジティブ&リフレクティブな子どもを育てる授業づくり』にて紹介を行った他、日本の教員養成課程でのこれまでの哲学対話の実践の成果に関して International Council of Philosophical Inquiry with Children の年次大会にて口頭発表を行った (Eriko Yamabe. 2022. Philosophical Dialogues in Undergraduate Seminars: How do the experiences of philosophizing affect the teaching philosophies of pre-service teachers?)。また、口頭発表の内容をもとにした内容は Arie Kizel (ed.). 2023. *Philosophy with Children and Teacher Education: Global Perspectives on Critical, Creative and Caring Thinking*. Routledge. 所収の Wakako Godo and Eriko Yamabe. What Conflicts Do Teachers Face in the Process of Transforming Their Professional Identities through P4C in Their First Years of Practice? にて公開された。ここでは、哲学対話を行うことで教育観をはじめとする価値観が揺さぶられ、教師としての自信を一時的に失うケースがあることを指摘した。

第三に、社会の構造上の問題に無自覚な参加者が多く集まった場合、リフレクションでも哲学対話でもその自覚を十分に促すことはできないという問題意識のもと、Nel Noddings and Laurie Brooks. 2016. *Teaching Controversial Issues: The Case for Critical Thinking and Moral Commitment in the Classroom*. Teachers College Press. を翻訳し、山辺恵理子 監訳『批判的思考と道徳性を育む教室』(学文社、2023年)を出版。その内容をもとにした研修も開発・実施した。また、社会の構造上の問題の一つである、心理学等の学術研究における女性の視点の軽視の問題を指摘した Carol Gilligan. 1982. *In a Different Voice*. Harvard University Press. の新訳として、川本隆史・山辺恵理子・米典子 訳『もうひとつの声で 心理学の理論とケアの倫理』(風行社、2022年)を出版した。これらの知見をもとに、現代日本の教師教育分野においてとりわけ取り扱うべき社会課題・論争問題に焦点を当てたワークショップの開発を進める予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Eriko Yamabe
2. 発表標題 “Philosophical Dialogues in Undergraduate Seminars: How do the experiences of philosophizing affect the teaching philosophies of pre-service teachers?”
3. 学会等名 International Council of Philosophical Inquiry with Children (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Eriko Yamabe
2. 発表標題 Rethinking the Ethical Validity of Restorative Justice in Education
3. 学会等名 World Educational Research Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 中田 麗子、佐藤 裕紀、本所 恵、林 寛平、北欧教育研究会 編集	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 272
3. 書名 北欧の教育再発見	

1. 著者名 ネル ノディングス、Nel Noddings、ローリー ブルックス、Laurie Brooks、山辺 恵理子、木下 慎、田中 智輝、村松 灯	4. 発行年 2023年
2. 出版社 学文社 (GAKUBUNSHA)	5. 総ページ数 312
3. 書名 批判的思考と道徳性を育む教室	

1. 著者名 Arie Kizel (ed.)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 278
3. 書名 Philosophy with Children and Teacher Education: Global Perspectives on Critical, Creative and Caring Thinking	

1. 著者名 キャロル・ギリガン、川本隆史、山辺恵理子、米典子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 風行社	5. 総ページ数 438
3. 書名 もうひとつの声で 心理学の理論とケアの倫理	

1. 著者名 中田正弘（編著）、稲垣桃子、酒井淳平、坂田哲人、村井尚子、矢野博之、山辺恵理子、山本剛己	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 160
3. 書名 『ポジティブ&リフレクティブな子どもを育てる授業づくり 「学びに向かう力」を発揮し、協働的に学ぶエデュスクラム』	

1. 著者名 中田正弘（編著）、大越さとみ、坂田哲人、村井尚子、矢野博之、山辺恵理子、渡辺秀貴	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 144
3. 書名 『ポジティブ&リフレクティブな子どもを育てる学級づくり：「学びに向かう力」を育てるこれからの学級づくり入門』	

1. 著者名 荒木寿友・藤本文（編著）荒木紀幸・西野真由美・藤原孝章・山岡雅博・山辺恵理子・武藤世良・小田亮・川本哲也・林創・岡田有司・藤井基貴・上田仁紀・久保田笑理・堀田泰永・竹内和雄・木原一彰・幸田隆・藤原由香里・星美由紀・鈴木憲・鈴木賢一・松尾廣文・高野阿草・六車加代（著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 267
3. 書名 道德教育はこうすれば もっと おもしろい：未来を拓く教育学と心理学のコラボレーション（山辺恵理子 第8章「法教育と道德教育：当事者視点で反道徳的行為への対応を考える「修復的正義」」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------